

第 1 3 回北九州市 P C B 処理監視委員会議事要旨

- 1 開催日時 平成 1 7 年 1 2 月 8 日 (木) 1 4 : 0 0 ~ 1 6 : 3 0
- 2 開催場所 日本環境安全事業(株) 北九州事業所
- 3 会議次第
 - (1) 第 1 2 回監視委員会視察報告
 - (2) 操業開始 1 年の総括
 - (3) 第 2 期処理施設について
日本環境安全事業(株)からの報告 (豊田事業所における P C B 蒸気漏洩事故)
- 4 出席者
 - (1) 委 員

浅岡 佐知夫 委員	稲永 勝 委員
柿内 よし子 委員	是永 逸生 委員
嶋津 元彦 委員	津田 潔 委員
成田 裕美子 委員	古野 和彦 委員
水城 秀信 委員	
 - (2) 日本環境安全事業(株)

事業部長	木村 祐二
事業部審議役	立川 裕隆
事業部運転技術課長	倉持 徹也
北九州事業所長	吉本 範男
北九州事業所副所長	石川 学
北九州事業所運転管理課長	野口 義一
 - (3) 関係行政機関

環境省産業廃棄物課課長補佐	山本 郷史
北九州西労働基準監督署安全衛生課長	松尾 篤睦
若松海上保安部警備救難課長	野崎 博
福岡県環境部廃棄物対策課課長補佐	田口 憲
北九州市	
環境局長	垣迫 裕俊
環境局環境政策部長	堀口 尚人
環境局環境監視部長	井上 正治
環境局産業廃棄物対策室長	原口 清史
環境局監視指導課長	齊藤 寛
環境局環境保全課長	薬師神 重二

若松区まちづくり推進課長
港湾空港局計画課長
消防局警防課主査

伊藤 隆彦
吉永 高敏
永友 義夫

(4) 事務局(北九州市)

環境経済部長
環境経済部主幹

今永 博
入江 隆司

5 議事概要

【Q = 質問、A = 回答、D = 要望、O = 意見・感想】

会議に先だって、委員は、監視委員会の要項に基く施設への立入りを行った。
監視委員の施設への立入りは、本年3月の第11回監視委員会以来となる。

○ 委員長

それでは本日の議事に入る。

議事に入る前に、私を含めて9名の委員は、今、会議に先立ち、3月以来久しぶりに施設への立入りを行った。そこで、各委員から立入りの感想を頂きたいと思う。前回の立入りに関しては、第11回監視委員会だよりに書いてあるので、それを踏まえて感想をお願いする。

立入りに関する委員の感想および質疑

○ 委員

O: 本日は気になっていたことが確認できた。まず、ポンプに取り付けてある圧力計やその他装置の計器の取り付け部分について、次に、建屋内のPCB管理区域の負圧管理の状態等を見させて頂き、安全であることが確認できた。各作業場も、きちんと整理整頓がされていた。これからも情報公開と、安全管理が徹底され、地域社会との良好な関係を継続して頂きたいと思う。

○ 委員

O: 前は主に中央監視室の方から見させて頂いた。今回は中に入り、作業者の実際の作業の状況がよく確認できた。一番厳しい粗解体室での作業は、やはり手作業が多く、設備とは違った面での厳しさや難しさがあるように思った。また、ベース鋼板(鉄心)をはがす作業も、最先端の設備としては、手作業が残りすぎているのではないかと思った。その他の部分では上手く行っている様に思った。

○ 委員

O: 施設の改善が必要ではないかとの観点から、いくつか報告する。まず、作業場全体が多少暗いのではといった感じを受けた。立ち仕事で行っており、体の向きを変えたりすることがあるので、手元を明るくする必要があるのでは

はないかと思った。次に、特に粗解体室で作業を行っている方は、本当に大変だと感じた。今日は車載トランスの解体作業が行われていたが、そうしたところを見ると、作業時間を少しでも短縮し、休憩を多く取れるような工夫が望まれるのではないかと思った。是非この点については、今後の作業工程の見直し等の中で検討頂き、次の時には作業場全体の雰囲気が変わっていることを切に望む。

○ 委 員

○： ＰＣＢ廃棄物の処理は、相当に手間のかかる手作業が必要とされていることや、ＰＣＢが難しいプロセスの中を踏まなくてはならないという実態を市民の方が知れば、負の遺産であり害のあるＰＣＢを残すことが非常に危険なことを充分認識してもらえるのではないかと思った。

○ 委 員

○： 防護服や手袋をはめて行う作業について、コアの解体などもう少しスムーズに行えるような方策が必要だと思った。

○ 委 員

○： 仕事とはいえ、あれだけの防護服を着ての作業は大変だと思った。前回も言ったが、身体面と同時に精神面での健康管理も十分にしていきたいと思った。

○ 日本環境安全事業(株)

○： 施設に立入り頂き、何件かのご意見・ご指摘を頂いた。操業開始後１年になるが、前回立ち入って頂いた時よりは、作業環境における作業台や局所排気等の機器が増えていたと気づいたと思う。これは、作業を見直し、できるだけ中腰にならずに作業することができるように作業台を導入した。さらに、局所排気も取り入れた。また、休憩時間については、４５分間作業し、１５分間の休憩をとることとしている。作業者の意見を取り入れ、短時間で作業効率を高める努力を行っている。

できるだけ自動化を行いたいと思うが、トランス・コンデンサには様々な形のものがあり、全てを自動化することは難しい。特に、本日見て頂いた、鉄芯をはがす作業は、トランスオイルが付着しており、自動化できないため、１枚１枚手作業で行う必要がある。

○ 委 員 長

○： 委員の意見をまとめると、安全性と作業効率は、作業者のスキルに大きく依存している。安全に作業するためには、作業者のうっかりが起らないような教育や、モチベーションを維持するための対策をお願いしたいと思う。

続いて議題１として、前回の委員会で行った視察報告を行う。

事務局の報告の後、各委員から感想を述べて頂き、これをもって１２回の委員会としての視察の報告とする。

(1) 第 1 2 回監視委員会視察報告

・〔資料 1〕にて監視委員会事務局が報告。

- 平成 1 7 年 6 月 1 6 日、1 7 日に行った視察（三菱化学四日市事業所及び日本環境安全事業(株)豊田事業所）の報告を委員会事務局より報告。
- 視察の報告および、委員の感想は資料 1 及び、監視委員会だより 1 2 号にまとめている。

○ 委 員 長

それでは、あらためて、各委員に感想をお願いします。

○ 委 員

○：一番記憶に残っているのは、三菱化学の施設が、プラズマ方式で非常に簡潔にできており、スムーズに処理が行われていると感じたこと。また、豊田事業所は、ＪＲ新幹線のトランスを処理しており、限定された形のものをコンパクトに処理できる施設だと思った。また、施設は、非常に狭く、すぐ隣に川や住居があるところで、きちんに行われていることに感心した。

○ 委 員

○：豊田事業所はかなり敷地が狭く、すぐ隣が道路となっている。北九州の感覚で見ると、どうなのかなと思った。また、処理施設と近隣の住宅がかなり迫っており、これらは今後豊田の監視委員の方々が監視の目を光らせていくと思う。北九州は間を広く取って頂いており、伸び伸びと行えると思った。また、三菱化学は、プラズマ処理を見させて頂き、技術力に感心させられると同時に、三菱化学の方の「9 6 8 トンの P C B を自分のところで作った以上、これを安全に早く処理しなければ一企業としての倫理観がなくなっていく」との言葉を聞き、利益追求型の企業倫理で日本が揺れている中、そうした倫理観をもって他の企業の方々もやって欲しいと思った。

○ 委 員 長

その他の感想については、視察報告書及び、監視委員会だよりをご確認頂きたいと思う。

端的に言うと、状況によって、豊田と北九州で対応が違ってくることもあるが、どちらも、安全に処理を行うことへの取組姿勢は同じということである。今後、2 期工事の話が出てくると思うが、豊田も含め、こうしたことを踏まえて事業を進めて頂きたいと思う。

また、三菱化学に関しては、委員が述べたとおりと思うので、これをもって、視察報告にしたいと思う。

続いて、議題 2 に入る。この施設が操業を開始してちょうど 1 年になるが、環境省よりこの総括をして頂き、続いて日本環境安全事業(株)より詳細の情報を報告頂く。

(2) 操業開始1年の総括

・〔資料2-1〕を環境省が説明。

- 操業開始1年の節目に、PCB処理事業の監督官庁である環境省より、この1年間事業が安全かつ順調に行われた旨の報告。
- 詳細の内容は、資料2-2以降で日本環境安全事業(株)より報告。

・〔資料2-2～5〕を日本環境安全事業(株)が説明。

- 環境省の総括を踏まえ、日本環境安全事業(株)より報告を行った。
- 内容は、11月末の受入状況等、環境モニタリングの結果、北九州事業の全般的な総括、最後に、9月に行われた内部技術評価に関することについての報告である。

○ 委員長

今の説明に対して質問等は。

○ 委員

Q：処理状況を報告頂いたが、処理した企業数を教えて頂きたい。また、その中で中小企業が占める割合がどの程度か。さらに、その中で補助の申請がどの程度されているか。といったことを説明して欲しい。

○ 日本環境安全事業(株)

A：市内分のトランスについては、保管事業者が35社、使用中の事業者が5社ある。トランスを全て処理した事業者は5社。そのうちの3社はコンデンサが残っている。また、コンデンサについては、保管事業者が、338社、使用中の事業者が27社ある。併せて365事業者あるが、そのうちの103事業者が、全て処理を完了している。中小企業の割合は、コンデンサの総処理事業者数の概ね2割である。

○ 委員

Q：資料2-2：P4の処理済残渣（液処理固形物）と、含浸物については具体的にどういった処理をしているのか説明して欲しい。立入り時に鉄製の大きな箱で残渣の払い出しを行っている場面に遭遇した。中身を教えて頂きたい。

○ 日本環境安全事業(株)

A：液処理時の遠心分離で固形物が出てくるがこの固形物が処理済残渣である。液の方は処理済油として有価で払い出しており、処理済残渣は焼却している。立入り時に払い出しが行われていたのは、まさにこの処理済残渣である。また、含浸物（木や紙など）は、主にコンデンサの素子であり、これ（木や紙である）は、細かく切り刻んで洗浄した後、PCBが含まれないことを確認した上で払い出している。

○ 委員

Q：セーフティーネットで活性炭を使用しているが、取替えた活性炭の処理はどうしているのか。

- 日本環境安全事業(株)

A：既に活性炭の交換を行っている。取替えた活性炭は、２期施設での処理を考えており、現在は施設の中で保管している。
- 委 員 長

Q：今の質問に関連して、活性炭の性能について質問する。活性炭を取替える前の性能と、実際に取替えたときの性能に、どのような差があるのか。また、期間を区切って、定期的に取り替えを行うのか。
- 日本環境安全事業(株)

A：メーカーから提案された交換頻度がある。試運転の途中でチェックしている。交換頻度は年に１回であり、前は、定期改修時（８月）に交換を行った。まだ（実績）数字については結果が出ていない。
- 委 員

Q：建屋内でのヒヤリ・ハットが資料に書かれているが、収集運搬でのヒヤリ・ハットがあったら教えて欲しい。また、職場ミーティングをするように書かれているが、職場で働いている方々の要望・意見として、こういったものがあるのか教えて欲しい。きちんと上に届いているか確認したいと思う。
- 日本環境安全事業(株)

A：収集運搬でのヒヤリ・ハットは、私どもの事業所では受入以降のものは吸い上げているが、それ以前の収集運搬に関しての情報は入手していない。
- 北九州市

A：収集運搬は現在５業者あるが、現在のところヒヤリ・ハットといった状況の報告は報告されていない。
- 日本環境安全事業(株)

A：職場で実際に作業されている方の要望については、毎月、運転会社との間で安全衛生協議会を開いており、そこで実際に作業されている方々の要望を含めて意見を出して頂いている。運転会社の中で開いている安全衛生委員会の中で、現場からの意見が出され、さらにこれらの意見を協議会に諮るという仕組みになっている。
- 委 員

Q：資料２－１について、処理が開始されて１年になるが、現段階で北九州市内にあるＰＣＢ廃棄物の何割位が処理されたのか。概算で良いので教えて欲しい。また、資料２－２について、処理後に払出しされているものは、最終的にどこで処理されているのか。もちろん払出物の中にはＰＣＢは含まれていないと思うが、輸送等について特段の配慮があるのか説明して欲しい。
- 日本環境安全事業(株)

A：（純粋な）ＰＣＢの処理量についての割合は、把握していない（市内に保管されているＰＣＢ廃棄物の台数は把握されているが、ＰＣＢそのものが、機器にどれくらい封入されているか確認できないため）。市内分のＰＣＢ廃棄物の受入状況について、トランス類は、５８９台中２０２台を受入れている。

また、コンデンサは、2,707台中588台を受入れており、現在処理を行っているものもある。

また、鉄・銅は、指名競争入札を行い、高いところに有価物として払い出している。処理済油も、A重油並のものとして入札を行い、高いところに払い出している。処理済残渣は、セメント会社に払い出し、溶融後セメントの添加剤としてリサイクルされている。含浸物も産業廃棄物として焼却した後、セメント材料としてリサイクルされている。碍子は、産業廃棄物として払出し後、路盤材として再利用されている。

○ 委 員

Q：塩類はどうなっているのか。

○ 日本環境安全事業(株)

A：処理済残渣として、光和精鉱へ払い出し、そこで焼却されている。

○ 委 員

Q：資料2-4・5で、運転会社と(JESCO)との関係をお聞きしたい。

ヒヤリ・ハットに関して、安全衛生管理の方法がどのようなになっているのか。

また、保全関係について、具体的方法は運転会社に管理させているといった方法で、2段の管理になっているが、実際に責任を持っている会社(JESCO)と、実際に運転を行う会社(運転会社)の関係はどのようなのか。

○ 委 員 長

Q：先ほどの安全衛生協議会の話にも係るが、運転会社とJESCOの間で、安全管理・保安全管理に不備がないかということであるが。

○ 日本環境安全事業(株)

A：ヒヤリ・ハットの吸上げについては、まず、運転会社の中で、ヒヤリ・ハットを集める仕組みがある。また、JESCOにもヒヤリ・ハットを集める仕組みがある。現場で作業を行っているという面では、運転会社のヒヤリ・ハットの方により現実味がある。これについては、運転会社から、安全衛生協議会の場に報告してもらい、公開で報告させて頂いている。また、保全関係については、基本的に、JESCOから運転会社に対して、運転については運転指示書、保全については保全計画の指示書を出している。運転会社には装置を全面的に運転管理する側の業務があるため、安全に運転すると同時に日常点検を通して、施設の健全性を維持してもらうこととしている。運転会社からあがってきた故障や異常等については、JESCOが修理業者へ指示し、修繕を行わせている。工事の立会いや確認は運転会社にも協力してもらうが、責任はJESCOで負うこととしている。

○ 委 員

Q：労働安全という観点から見て、事業所が安全管理体制を作り、安全管理を進めていかなければならないが、運転会社と日本環境安全事業(株)北九州事業所との関係で、安全管理の体制がどのようなになっているのかという質問である。両者が、同じ統括安全管理者、同じ体制の下で管理を行う仕組みになっているのか、説明を願う。

- 委員長
Q：今の質問は、親会社が全責任を持つ体制が主本であり、その中で委託会社の安全管理責任が加味されるのかということである。これは確立されているのか。
- 日本環境安全事業(株)
A：JESCOには、運転業務を委託する側としての安全管理責任があり、運転会社にも、運転業務を請け負った側として、作業を行う中での労働安全がある。事業所としては、運転会社と一緒に確認しながら、責任を持って実施していくつもりである。
- 委員長
Q：今の質問に関連して、資料2-5の内部技術評価は9月に実施されているが、現在までに、この指摘事項に関する対応策は、基本的に実施されていると理解してよいのか。
- 日本環境安全事業(株)
A：期限を決めて取組みの計画を出している。一部実施しているものもあるが、多くは12月までに対策を決め、1月から実施する。一部、3月一杯まで時間がかかるものもある。
- 委員長
O：安全に関する項目は、最優先で速やかに実施して頂きたいというのが、委員会からの意見である。
- 委員
Q：資料2-5技術評価結果に関して、原単位管理の推進とあるが、差し支えなければ費用と効果の対比について教えて欲しい。
- 日本環境安全事業(株)
A：原単位管理については、本社・他事業所も含めて、今後どうして行くのかを検討中である。
- 委員
Q：11月までに視察者総数が522件・約4,000名ということであるが、そのうち、小中学生はどの位来ているのか。九州電力等では、原子力について安全面を含めた理解をしてほしいということから、大人よりも、小学生を対象として原子力発電所の見学を率先して実行している。このPCB処理施設で、子供たちの見学対応はどのように考えているのか説明願う。
- 日本環境安全事業(株)
A：見学者数については、台帳に記入頂いた方の人数を報告している。これによると、小中学生が団体で見学に来た事例はない。今後見学に来た場合の対応は十分可能である。
- 委員
Q：資料2-4のPCB廃棄物の受入状況について、市内保管事業者の希望によると思うが、(早期登録すれば)処理費用の軽減措置があるにもかかわらず、(未登録の事業者が)まだ1/3あるのは何が原因か。また、100%登録

される時期はいつ頃と見込んでいるのか。

○ 日本環境安全事業(株)

A： J E S C Oでは、1年間かけて早期登録を進めており、その途中段階で、未登録の事業者に対して早期登録を促すための手段をとっている。しかし、あくまでも、事業者の意向によるため、J E S C Oとしては、できるだけ早期登録を進め、全体の処理計画に反映させたいと考えており、今後努力していきたいと思う。

○ 委員長

続いて議題3に入る。議題3は第2期の処理施設についてである。

(3) 第2期処理施設について

・〔資料3〕を日本環境安全事業(株)が説明。

- 第2期施設について報告。
- 第2期施設では、高圧トランス・コンデンサに加えてP C B汚染物（安定器、汚泥など）の処理を行うための工程が必要になる。
- P C B汚染物の処理は、多様な性状に対応するため、前処理なく一括して処理ができる方法について、環境省とJ E S C Oで検討を重ねてきた。
- ここでは、様々な処理技術を説明するが、実際に採用される技術は、今後入札などで決定することになる。

○ 委員長

この件に関しては、処理システムを総合的に評価するため、日本環境安全事業(株)の「ポリ塩化ビフェニル廃棄物処理事業検討委員会北九州事業部会」の委員として、検討の中心となって頂いている産業医科大学の伊規須教授と、早稲田大学の永田教授にお越し頂いているのでコメントを頂く。

○ 産業医大 伊規須教授

第2期施設の概要については日本環境安全事業(株)より説明があったが、2期が完成することにより、第1期と合わせて、北九州事業の処理施設が、よりスムーズに動くことになると思う。北九州の施設は、全国初のものであり、事業を進めるうちに予期しなかった問題も生じるが、これは仕方ないことである。この施設は、建物の外部に対しては、全く問題ないが、内部の作業環境に関して、ダイオキシン類の濃度が目標を満たす状況にないため、引続き、当初の予定より基準の高い保護具等を着用し、適切な対応を取りながら作業することとなる。実際の現場を見て、監視委員の皆様から、作業者に負荷がかかっているのではないかという意見があったが、こうしたところにつながっているのではないかと思う。作業者に過剰な負荷をかけないための対策については、我々産業医大にエキスパートが最も揃っており、事業検討委員会の

作業安全衛生部会の委員にも多く入っている。今後も作業者の安全を含め、1期2期合わせて北九州の事業がスムーズに進展していくものと思っている。

○ 早稲田大学 永田教授

熱心にご討議頂きありがとうございます。私は、事業検討委員会の委員長を務めております。さて、第2期を含めて全体の計画が完成するが、これは、当初からの計画どおりに進んできたものである。私も、平成13年に北九州で開かれた「安全性検討委員会」以来ずっと関わっているが、生きている限り、事業が終わるまで関わり続けるものと考えている。そうした流れの中で、安全・安心の下で施設を動かしていく、これがPCBを克服することにつながっていくのだと思う。また、こうした機会に皆様に処理の現状をお知らせすること、すなわち、情報を公開するのではなく、共有していくということが非常に重要であり、日本環境安全事業(株)にも十分実施して頂いていると思う。装置全体としては、第2期施設でも安全・安心を踏まえて設計・整備がなされる。もう一点、いくら良い施設を作っても、教育の問題を含めて、運転を行う方々が(安全・安心に対する)認識を持って施設を運営していかなければ、結局は全てに渡って安全・安心なものとはなっていない。技術に関する内部評価に関しても、今後も繰り返しやっていくことが大切である。本日頂いた質問事項や確認事項についても、次の内部評価の時には、確認しろと言って頂きたい。皆さんの意見を反映させる形で内部評価を行うべきだと思う。監視委員会は非常に重要な役割を果たしていると思う。本日は、たまたまこちら側(行政関係者席)に座っているが、専門的なことについては、いろいろな立場から発言することもある。ただし、どんな立場になっても、専門家としての心構えや考えが揺らぐことはない。そうした姿勢の下、監視委員の皆さんからのご意見を頂くことで成長させていくのだということを踏まえて、活発にご議論・ご意見を頂きたいと思う。今後も、覚悟を持って、この問題に取り組んでいくものである。そうした中で、皆様とともに日本のPCB処理全体に挑戦し、負の遺産を片付けていくということを実現していきたいと思っている。

○ 委員長

ありがとうございました。第2期施設の説明に関する事で質問は

○ 委員

Q：第2期の計画は、第1期に対して連続していなければならないと思うが、この辺りが基本になると思う。今、新しく対象となる安定器などについては是非、今とは別の視点からの手法やなどを是非取り入れて欲しいと思う。
(建設に関する)タイムリミットはいつか。

○ 日本環境安全事業(株)

A：まず、2期は1期と連続していなくてはならないということは、そのとおりだと思っている。説明資料にもあるが、2期施設においてもトランス・コンデンサを中心として処理を行っていくこととなるので、1期施設との連携

が重要である。また、スケジュールについては、今後、施設の発注公告を行い、処理方式を決定し、建設工事を行い、事業を開始するといった流れになる。来年早々には発注公告を行い、施設の設置に向け動き出したい。最も順調にいった場合で、処理の開始は平成 20 年度になると考えている。

○ 委 員 長

Q： 第 1 期施設を操業しながら第 2 期施設の建設を行うのか。

○ 日本環境安全事業(株)

A： そのとおりである。

○ 委 員 長

Q： その際に、特別な配慮を行うことは検討しているのか。

○ 日本環境安全事業(株)

A： 1 期施設の処理期間に余裕があれば施設を止めて行うこともできるが、こうした対応が、限られた処理期間の中で、一刻も早く P C B 廃棄物を処理したいという事業者の希望と相容れないことあり、1 期施設を動かしながら 2 期施設の建設を行うものである。そのための工夫についても技術提案を受けた中でしっかり見ていきたいと思う。

○ 委 員 長

これで、予定の議事は全て終了したが、先日私達委員が視察に伺った、豊田事業所において、P C B の漏洩事故が発生したとの報告を受けている。この件について、日本環境安全事業(株)より報告がある。

日本環境安全事業(株)からの報告（豊田事業所における P C B 蒸気漏洩事故）

・〔報告資料〕を日本環境安全事業(株)が説明。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">➤ 11月21日日本環境安全事業(株)豊田事業所で P C B 蒸気漏洩事故が発生。➤ 構造的な問題等々が重なって起こった事故であるが詳細は現在も確認中。➤ 今回の事故をもとに、北九州事業所では、施設的にはどうなのか、また、今後どのような取組みを行うのかなどについて報告。 |
|--|

○ 委 員

Q： この事故の原因となった圧力計であるが、これは、ねじ込み式か。

○ 日本環境安全事業(株)

A： そのとおりである。

○ 委 員

Q： 原因は、ねじが緩んだことによるものか。

○ 日本環境安全事業(株)

A：直接的には、ねじが緩んだ事によるものであるが、これに至った原因については詳細を確認中である。振動により緩みが大きくなったことは想定される。また、圧力計は3日前に点検で外しており、そのときの据え付けに問題があった可能性が大きいと考えている。

○ 委 員

Q：装置の事故は、部品などの不良ではなく、設置の仕方が要因となる場合もある。今回の場合も、単純なねじ込み方式で、メーター面を前方向に向ける方策をとれば、そうなるのが当たり前である。今の話からすると、人為的なミスだと思う。最初に、直接的な原因が何かということを徹底的に追求しなければならない。圧力計が全部おかしいとか、どの圧力計がおかしいとか疑いをかけるのではなく、是非しっかり確認をして欲しい。

○ 委 員 長

Q：今の話に関連して、北九州事業所内に、ねじ込み式のバルブ等、フランジ式でないものがどの程度あって、それを全部点検し終わったかどうかを説明して欲しい。

○ 日本環境安全事業(株)

A：危険物の配管についての点検は若干残っているが構造はねじ込み式ではない。また、窒素などの空気のラインにはねじ込み式の圧力計が使われている。

○ 委 員

Q：“まわり止め”という方式があり、構造にもきちんとした規格がある。こうしたことをしっかりと行っていれば、あのような事故は起こらない。インターフェイスでの作業における人為的なミスであり、それをもって、ねじ込み式が悪いということにはならないと思う。その方式でミスをしないような手段をとれば問題ないと思う。

○ 日本環境安全事業(株)

A：いずれにしても、今回の事故を踏まえて、施設側の問題、それから、人間の方、すなわちソフトの問題、この両方を総点検して、二度とこのような事故が起こらないようにしていきたいと思う。

○ 委 員

Q：今、総点検するとの説明があったので、後に伺ってもよいが、発生時刻の午前2時から、排気切り替えの6時までの4時間の間にいったい何をしていたのか。また、豊田事業所は、住宅がかなり近接しているが、今回の事故を受けて、周辺住民への報告はどのように行ったか。メディアへの情報提供はどうしたのか。

○ 日本環境安全事業(株)

A：メディアに対しては、事故が起こった日の午前中に、豊田市の記者クラブを通じて公表を行った。当日及び翌日にかけて、テレビ・新聞等で大きく報じられたが、報道の範囲はローカルであった。また、2時から6時までの対応については、現在、徹底的に調べているが、運転作業員に対する教育訓練が十分でなかったということが原因であったと認識しており、施設側だけでな

く、運転作業員に対しても、特に、緊急時に迅速に動きができるように教育を徹底して行きたいと思う。活性炭装置への切り替えについては、今後切り替えなしで、常時活性炭を通した形で排気できるよう対応したい。

○ 委員長

Q：作業員の作業マニュアルの中にチェックして切り替えを行うことは、入っているのか。そうであれば、作業員が十分教育を受けていなかったということになるのか。

○ 日本環境安全事業(株)

A：マニュアルの中に入っているが、結果としては、実際起こった（と想定された）ときの動きを練習していれば、このようなことにはならなかったと思う。

○ 委員長

Q：これに関して北九州事業所では、どのようになっているのか。

○ 日本環境安全事業(株)

A：北九州の施設では、トランス・コンデンサを受けているが、受け入れの際に滲みを発見し、緊急の排気に切り替えるといった作業を行った経験がある。念の入れすぎとも思うが、対応した経験はある。もちろんマニュアルもあり、それに従って作業を行なっているが、豊田での事故を受けて、11月30日にもう一度念を入れて、再教育を行ったところである。

○ 委員長

最後に全般的なことでも結構なので何か質問はないか。

○ 日本環境安全事業(株)

A：補足の説明をしたい。

先ほどの質問の中で基金に関することがあった。中小企業に対する処理費に対しては、補助金と基金を合わせて70%の助成がある。また、早期登録をした場合の5%割引と併せると75%の費用が低減される。これは、JESSCOへ申請して頂ければ一括して受付できる。

次に、PCB廃棄物の受入れ状況について、トランス589台中202台と言ったが、試運転中にはトランスを20台、コンデンサを138台処理しているので、これらを足すとこれまでの処理台数になる。すなわち、トランスは589台中222台、コンデンサは2,707台中726台となる。

最後に払出し物であるが、塩分の入った固形残渣は、光和精鉱(株)に払い出している。木くず・紙くずコンデンサ素子等は、三菱マテリアルに払い出している。碍子はエコタウン内の(株)響エコサイトに払い出している。

以 上